

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	吉田 亜矢
論文題目	So Much Depends Upon a “Variable Foot”: The Legacy and Conquest of ‘Free’ Verse in William Carlos Williams (ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ: variable footの考案と「自由」詩からの脱却)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本学位申請論文は、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (1883-1963) に焦点をあて、現代アメリカ詩における定型の模索と「自由」詩からの脱却について考究したものである。ウィリアムズの韻律上の発見であるvariable foot (変性詩脚) の再評価のために、ウィリアムズと自由詩を考察する上で関連性が深いと思われるイギリス詩・フランス詩との比較分析を行い、初期に見られた伝統的韻律や自由詩に対する詩人の飽きたらぬ思いが、最終的には理想の韻律へと昇華していく過程を視覚的・韻律的に分析している。</p> <p>第1章では、まず、フランス詩人の中で興った自由詩への傾倒を、ヴィクトル・ユゴー、ステファヌ・マラルメ、ポール・ヴァレリーなどの著作に言及しながら概観することで、ウィリアムズが個性的アメリカ詩人として果たす運命にあった英詩における革新の必要性の背景を確認する。自由詩といえば、ウォルト・ホイットマンの詩がその萌芽として取り上げられるが、本章では、独自にフランスの象徴派詩人を比較対象に据える。定型詩から段階的に逸脱を試みるヴァレリーの大胆な試みを、習作期を経たウィリアムズの詩作姿勢に投影することで、キーツ詩の模倣から始まった詩作が、徐々に American idiom により適した新定型の探求へと変容していく様子を検証すべく、後期ウィリアムズの詩風からはほど遠いと思われるソネット「詩の効用」 “The Uses of Poetry” (1909) や、ウィリアムズの詩の中で最も人口に膾炙した「赤い手押し車」 “The Red Wheelbarrow” (1923) などの韻律分析を展開している。</p> <p>第2章、第3章においては、ウィリアムズの二大特質である視覚性とリズムが、それぞれ考察されている。ウィリアムズにおける、詩と絵画における意匠の融合の試みを、「ブリューゲルの絵画」 “Pictures from Brueghel” (1962) 中の数編の詩と、それらの詩が言及しているところの画家ブリューゲルの絵をあらためて比較対照することによって、詩人が詩と絵画の鑑賞・制作過程を同一視していたことを明確にした。さらに、ウィリアムズ詩のリズムの特徴を、伝統的韻律分析 (スキャンション) に依拠するのではなく、詩人自らの朗読に即して検討し、また、ジェラルド・マンリー・ホプキンズの英詩上のリズムの再発見であるスプラング・リズムの原理を踏まえながら、ウィリアムズが試みた固定詩脚の解放—すなわち variable foot—の革新性のもつ英詩上の意義を明らかにしている。</p> <p>第4章では、晩年の長編詩「アスフォデル、永遠に咲く花」 “Asphodel, That Greeny Flower” (1955) を取り上げ、記憶と喪失、新旧の対比が物語られる本作品において、</p>			

ウィリアムズ初期の伝統に対する反骨精神が影を潜め、むしろ、嫌厭して止まなかった弱強五歩格が効果的に織り交ぜられて詩行が進められていく実態を詳らかにし、加えて、W. H. オーデンが variable foot を模して書いたと思われる詩「浴室礼讃」“Encomium Balnei” (1962) を検討することで、ウィリアムズにおける「自由」の内実と克服をオーデンとの対比において提示している。

終章において、ウィリアムズが「自由」詩超克という自らが掲げた目標に対して辿った道程を総括し、キーツの詩を模倣することから始まり、ホイットマン流の自由詩を疑問視する中で自身の詩作の方向性を定め、ホプキンスのスプリング・リズムを前進させ、詩脚を目に見える形で可視化した結果、variable footに至ったと結論付ける。これは、詩を書くことと絵を描くことを同一視する視覚的センスと、American idiom のリズムを詩に生かすという韻律的センスを兼ね備えたウィリアムズならではの発明であり、また一方で、晩年の作品「アスフォデル、永遠に咲く花」において、封印されていた旧来の韻律が variable foot の詩行に見え隠れする事実の中に、ウィリアムズの詩人としての成熟を見出し、隙のないイギリス詩の伝統的韻律という岩間に、ウィリアムズは variable foot という異色の一輪を見事に花開かせたと結論する。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文において特筆すべきは、従来、本邦のウィリアムズ詩研究において比較的等閑視されがちであった韻律論的側面の解明に果敢に挑戦し、特に、難解とされてきた詩人独自のvariable footによる詩作法に、録音に残されたままになっていた音声資料を活用することによって新たな光を当て、そこに、詩人の生涯続いた絵画に対する関心と、詩人としてアメリカ独自の詩法を追求し続けた事実を結び合わせることを通じて、ウィリアムズ詩の到達点にある重大な作詩上の特質を、フランス詩やイギリス詩の伝統を踏まえながら、明らかにした点である。

ウィリアムズの独創になる variable foot については、不分明な点が多く、多年、批評家を悩ませてきた。それに対して、申請者は、一見して、行の構成単位である foot (詩脚) であるとみえるそれぞれの部分が、実は一行を構成し、ひとまとまりの一行を構成するとみえる3行が実は stanza (連) となる、つまり、従来の foot は line に、従来の line は stanza にそれぞれ階層が一段上がった詩形であると明確に指摘する。この詩形について従来知られているウィリアムズ自身の発言には矛盾があるとされていたが、申請者は、印刷に未だ付されていない、ウィリアムズ最晩年に行われたインタビュー資料や講義資料にあたることで、従来、意見の分かれていた、この詩形の視覚的効果について、それが詩人のリズムへの理論的関心と有機的に結びついていることに着目する。これによって、矛盾なくひとつの総合的見解に発展させたことは高く評価できる。

加えて、その追究の過程において示された、フランス詩、イギリス詩(特に、キーツのソネットの脚韻の特徴に関する分析には目を見張るものがある)、並びに、ウィリアムズ自身の抒情詩の代表作「赤い手押し車」“The Red Wheelbarrow” についての詳細な分析には、詩作品を広く、深く読み込んできた経験が生かされており、申請者の感性の豊かさやテキスト本文に対する鋭敏な分析力を窺わせる。そればかりではない。従来、画家になりたかったとの詩人の告白は背景情報に過ぎない扱いを受けてきた。それに対し、申請者は、詩作との有機的な連関が十分には検討されてこなかったこの絵画的手法への傾倒を丹念にたどり、ついには、本業の詩作との有機的連関を見出した。これは、単に、テキストの分析力ばかりでなく、学際的研究への適性を感じさせる。また、論文において示された高度な英語運用力は審査委員が口をそろえて認めるところであり、申請者の今後の益々の国際的飛躍が期待できる。

一方で、まだ、追究が不十分と思われる論点も指摘される。韻律面に集中するあまり、取り上げた詩のテーマや内容、あるいはウィリアムズの代表作「パターソン」との関わりについてはおぼろげな感が否めない。また、同時代のアメリカ詩人への言及も希薄であり、フランス詩の動向やイギリスの詩的伝統との関わりが強調されるあまり、時に、バランスを欠いた記述に陥ることがみられる。しかしながら、韻律的側面の記述が多くなるのは、取り組む主題からは、ある程度はやむを得ないことであり、また、アメリカ詩の伝統との関わりに関する記述が少なくなるのも、グローバル化した20世紀文学にあっては、むしろ、申請者自身のウィリアムズ理解の反映とも考えられるわけで、アメリカ詩人をより広いコンテキストから理解しようとする視点の広汎さと、詩人の関心に忠実に従った結果であるとも評することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。
また、平成28年7月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降